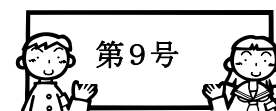


PTAだより



☆会長あいさつ☆

第23回冬季オリンピック平昌大会が開幕しました。日本選手の活躍が期待される中、冬季オリンピック史上最多8度目の出場を果たした45歳のスキージャンプ界のレジェンド・葛西紀明選手の活躍に、私は注目しています。予選では、スーツのチャックを閉め忘れるほど緊張と重圧を感じていると、テレビや新聞で知りました。

そんな葛西選手の活躍の影には、日本が金メダルを獲得した1998年の長野オリンピックのジャンプ団体で、レギュラーメンバーから外れた悔しさがあります。試合当日は、チームメートが金メダル獲得の歓喜の渦に包まれる光景を見届けることなく会場を後にし、やけ酒に浸った時もあったそうです。しかし、20年後の今も競技を続けているのは、あの時の悔しさがあったからだと言われています。

45歳という年齢でトップアスリートとして活躍される影には、計り知れない努力と苦悩があり、挑戦し続ける姿は、同じ歳の私にとって力になり、希望となっています。葛西選手をはじめ、日本選手団には、力を出し切り、悔いのない闘いと、活躍を期待したいと思います。

◆◇通学かばんについて◇◆

生徒・学校・PTAが一緒となって、通学かばんの見直しを進めてきましたが、新正かばん、新補助かばんの仕様が決まり、来年度から導入されることになりました。新かばんの販売・運用については、新入生説明会、生徒・保護者（1、2年生対象）にはお手紙で学校から説明していただいています。

保護者のみなさまにはアンケート、サンプルでのご意見など、ご協力いただきありがとうございました。

☆校長先生のお話☆

全国的にインフルエンザが猛威を振るい多くの学校で学級閉鎖を余儀なくされた1月になってしまいました。本校では全校朝集を2回中止したり、震災メモリアル集会を校内放送で行ったりするなどその対策を講じましたが、残念ながら2年生2クラス、1年生3クラスが学級閉鎖に追い込まれる状況になってしまいました。せめてもの救いは、受験を控えた3年生に大流行することがなかったことでしょうか。3年生については、ぜひベストコンディションで入試に臨んでほしいものです。

PTAの方々におかれましては、1月17日の炊き出しにご協力いただきありがとうございました。23年前を思い起こしながらおいしく食べさせていただきました。まだまだ寒い日が続きますが、春はもうそこまでやってきています。お体ご自愛くださいますようお願い申し上げます。

☆主な行事予定（教頭先生より）☆



2/15 (木)・16 (金) 公立推薦特色入試	3/12 (月) 公立一般入試
2/18 (日) 高専一般入試	3/13 (火) 1年校外学習
2/21 (水)～23 (金) 学年末テスト	3/19 (月) 公立一般合格発表
3/2 (金) 三送会	3/23 (金) 終業式
3/9 (金) 卒業式	

☆各学年の様子（教頭先生より）☆

1年生

1月は、アフリカの方との国際交流や福祉体験プロジェクトなど普段体験できないような活動をたくさんすることができました。学校の中での日々の生活も大切ですが、さまざまな体験の中で普段と違う自分を発見できればと思います。3月にも校外学習・盲導犬体験などの体験学習を行う予定です。2年生に向けて、より成長できたらと考えています。

2年生

1月はかるた会を楽しんだ後、インフルエンザの流行で、欠席者が多くなってしまいました。やはり、38回生の元気な姿が見られないのは寂しいものです。2月16日には姫路市のもづくり体験館へ行き、熟練技能者の優れた技術にふれ、ものづくりの楽しさ、奥深さを体験してきます。様々な学習、体験を自分の将来について考える良い機会としてほしいと思います。まだまだ寒い日が続きます。体調管理等ご家庭でのサポートをお願いいたします。

3年生

受検（験）が始まりました。面接練習、事前説明と生徒の顔つきも徐々に引き締まってきました。「進路は団体戦だ！」この言葉を合言葉に全員で励まし合いながら頑張っています。

また、卒業まで1か月となりました。卒業までの期間を充実したものとするよう、37回生全員で頑張ります。卒業記念品がまもなく届く予定です。ありがとうございました。

【愛護部】 ・2月のあいさつ運動へのご参加、ありがとうございました。
あいさつ運動は次回3月1日で最後となります。
残り少ないですが、あと1回ご協力の程よろしく願いいたします。

【文化部】 ・1月17日(水) 震災メモリアルの豚汁作りに多数ご参加いただきありがとうございました。
美味しい！と好評でした。
・1月31日(水) 入学説明会で制服等リユースを実施しました。
☆「制服等リユース」についてのお願い
リユース品の在庫が大変少なくなっています。提供していただける物がありましたら、お持ち下さい。随時、受付BOXを玄関に設置しています。

【副会長】 2月7日(水) 会長、副会長会に参加しました。

◆◆◆新2・3年生学級委員選出について◆◆◆

- ※ 3月上旬に抽選除外の対象となる方の申請書類を配布します。
- ※ 学級委員の決定（生徒によるくじ引き）・・・4月11日(水)
- ※ 各委員長決定・・・4月中旬

校長の独り言

校長 堀口和則

以前にもこの「校長の独り言」で書かせていただきましたが、私には3人の子どもがいます。現在、長女は一般のOL、二女は保険会社、長男は浪人中ですが、将来は税理士や公認会計士になりたいと言っています。



私の古くからの教員仲間の中には、ご息が同じ教員の仕事に就いておられる方が結構いらっしゃいます。私はその教員仲間の何人かに「教員になることを薦めたん？」と尋ねたことが何度かあります。返ってきたほとんどの返事は「いや。」でした。私も自分の子どもに「教員を目指してみたら・・・」というようなことは一度も言ったことがありませんし、言うつもりもありませんが、子どもが「なりたい」と言ってきたときには、教員の仕事のやりがいと辛さについてたくさん話をしてやろうとは思っていました。ところが、上二人の娘は就職先を考えると、教員の「き」の字も出しませんでしたし、末っ子の長男も現在のところ教員になる気持ちは全くなさそうです。こんなことを書くと私かわが子に教員になってもらいたいと思っているように誤解されそうですが、私は教員になってほしかったのではなく、「教員になってもいいかな」とさえ思ってもらえなかったことに少し寂しさを感じています。

「子どもは親の背中を見て育つ」と言いますが、私が朝仕事に向かう背中や夕食を囲んで私が話す仕事の話は子どもたちにとって魅力あるものではなかったのか、と反省させられます。

まったく寂しさがない訳ではありませんが、じゃあもう一度生まれ変われるとして、次はどんな職業に就きたいのかと問われると「教員を選ぶ」と答えるかもしれない自分があることを誇りに退職までの日々を全うしたいと思う今日この頃です。

私の曾祖父は建築家、私の祖父は教員、私の父は建築家、もしかするとまだ見ぬ孫は隔世遺伝で教員になってくれるかも知れません。



2月1日、5校時に「がんと共に」というテーマで公開授業があり、厚生委員の方の劇、2・3年生の代表による発表がありました。生徒さんたちは「がん」についてよく調べており、とても勉強になりました。せっかくですので、今回は「がん」についてお話ししようと思います。ただし、現在身近な方が「がん」に罹患し、大変な思いをされている方や身近な方を「がん」で亡くされ、まだ精神的に不安定な方は無理にお読みにならないようにしてください。

以前、こんな相談を受けたことがあります(プライバシー保護のために内容の一部を変えてあります)。

「同居している母(お子さんたちからは祖母)が「がん」の手術を受けましたが、余命3ヶ月と言われ、退院してきました。今はとても体調が良く、余命宣告を受けたとは思えません。本人もこのことは知っており、ずっと一緒に過ごしてきた中2と小5の孫と最後まで楽しく暮らしたいと言っています。子どもたちに本当のことを話した方が良いのか悩んでいます。もし祖母の病状が悪化して、子どもたちの気持ちも不安定になった場合どうすればいいか、学校にもお伝えし、何かお願いした方がいいのか、どうしてよいかわかりません。」

非常に難しい問題でした。家族も「がん」と闘わなくてはならないから、包み隠さず話した方がいいという考え方もありますが、お子様たちに現実を受けとめられる心理的強さがあるのか、さらにはお子様がパニックになっても、それを引き受けられる力が保護者の方にあるのかを話し合ってみました。そして、いろいろと支援の担い手があり、どのような支援をしてもらえるか、聞いてもらうことにしました。その上で、SCができること、学校にお願いすること、病院や区役所にお願いすることなどを相談しました。

ここでお伝えしたいことは、今回は「がん」の正体や特徴を知ったので、自分、もしくは身近な方にそれが現実になったときにどうすればいいのかをお子様とご一緒に考えてはどうかという提案です。これまで述べてきましたように、中学生は知的に大きく発達し、想像力も豊かで、感受性も敏感になる時期ですので、こうしたことを考え、学ぶには最適な時期かと思います。もし先ほどの相談の中の中2生だったら、あるいは保護者だったら、どのように感じたでしょうか？ また、どのようなことをしたらよいのでしょうか？

患者さんが「がん」と向き合っていく上で精神的に支援していくことを研究・実践する学問にサイコオンコロジー(精神腫瘍学)があります。とりわけ、患者さんや家族の方に寄り添っていくことは3つの主要な治療と同じくらい重要かと思います。私の友人が「がん」の手術を受け、主治医より「5年生存率は70%くらいですから、がんばりましょう。」と励まされたそうですが、友人には「30%は治りません」と聞こえたそうです。知(識)と(感)情にはこれくらい差があります。だからこそ、情を見つめることも大切だと思っています。

「がん」の知識から身近な方が「がん」にかかった時の気持ちの動きまでをわかりやすく書かれた本を紹介します。お子様とご一緒に読まれると、さらに「がん」のことが理解できるお薦めの一冊です。

東京女子医科大学がんセンター長／林和彦(著)／「がん」になるってどんなこと？

本日以降、以下のお日にちに相談室を開室しております。みなさまのおいでをお待ちしております。

3月1日、8日、15日(いずれも木曜)